

受講番号 18020 学校名 高知丸の内高等学校 氏名 澤松 千佐

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年4・5H 生徒数 19 名
 科目名 英語 I 単位数(授業時数) 3 時間 使用教科書名 Power On English I(東京書籍)

クラスの様子・特徴

単位制普通科の1年次生の習熟度別に編成された上位クラスである。英語に対する学習意欲や関心にはばらつきがあり、苦手意識を持っているものもいるが、授業には全員が熱心に取り組んでいる。おとなしい生徒が多く、問いかけに対する反応がよくない。

問題の確定

音読時の声が小さく、元気もない。積極的に自分から声を出そうとする生徒が少なく、単語の発音も十分に身に付いていない。

予備調査

A 授業の観察

授業始めの英語での挨拶の声は小さく、数人が答えるだけであり、積極的な生徒は少ない。教科書の一斉音読をしてもやはり声は小さく、正確な発音ができているかどうか判断できない。ただし、音読以外の面での取り組みには全員が熱心である。

B 生徒による授業評価

授業の評価は全体的に良好であった。音読に関しては、単語の読み方がわからない時に不安を感じていること、大きい声で読みたいが他の生徒が読まないで恥ずかしくて読めないということ、また間違った発音をすることを非常に気にしていること等がわかった。

C 学力データ

2回の定期試験の平均点は81.8と高く、授業で学習した内容についてはほぼ全員が一定の理解に達していることがわかった。ただ、定期試験では音読に関する評価はできていない。

リサーチ・クエスチョン

生徒が自分ひとりでも正確に、大きな声で教科書の英文を音読できるようにするにはどのような指導をすればよいか。

仮説・実践・検証

仮説1

⇒ 英文の意味を理解させ、リスニングや音読の反復練習に多くの時間をかければ、大きい声で音読できるようになるだろう(生徒のアンケートの中に、英文の意味を理解していないので音読がしっかりできないという意見が多かった)。

実践1

⇒ 新出単語の意味を確認した後、発音練習を一斉に行った。次に、本文を聞かせ、特に新出単語の発音やリエゾン部分に注意するよう伝えた。各パートの内容をフレーズごとに解釈させ、意味の区切れを意識させた。また、CDや教員の後について一斉に音読をし、その後CDを使用してシャドーイングを数回行い、リスニングにも集中させた。

検証1

ほとんどの生徒が今まで一文ごとの日本語訳を書いていたため、フレーズリーディングを始めた頃は戸惑っていたが、少数の生徒ではあるがきちんとした日本語訳に頼らなくなってきた。また、意味の区切れに／印をつけて読むように指導したので、以前よりもずいぶん英文らしく読むことができるようになった。シャドーイングは好評で、楽しんで取り組める練習方法のひとつとなった。

仮説2

⇒ ペアで音読練習をし、英文をみんなの前で発表させ、発表をポイントとして評価すれば、音読に積極的に取り組むようになるだろう。

実践2

⇒ 座席の隣同士でペアを組ませ、音読練習を実施した。会話の場合は人物を決めて読み、文章の場合は段落ごとに読ませた。緊張感を持たせるために5分程度の短い時間で数回違ったパターンで練習させた。その際、お互いの発音を注意して聞き、指摘し合うようにも指示した。ペアで練習した後、発表者を募り、数組に発表させ、発表者にはポイントを与え、積極的に発表するよう促した。

検証2

ペア単位での音読練習は、間違いを気にせず読むことができ効果的であった。ほぼ全員が意欲的に大きな声で練習した。ただ発表者がどうしても一部の生徒に偏ってしまうので、途中からは自発的な発表者も募るが、同時に数組指名し発表させた。また、いつも同じ人と練習することで慣れが生じてしまうので、一定期間で新しいペアに変更し練習させた。このペア変更も音読に意欲的に取り組むことに役に立った。

仮説3

⇒ 音読評価シートを作成し、毎回同じ項目を評価することで、自分の音読の変化を意識させるようにすれば、音読に意欲的に取り組むようになるだろう。

実践3

⇒ 音読の評価範囲を決め、音読評価シートを配布する。そのシートを使用してペアで音読練習させる。練習(発表を含む)後、評価シートにある項目について自分で評価させる。また時にはペアの相手の評価もさせる。自己、他者にかかわらず評価項目の2つ以上について肯定的なコメントを書かせ、次回への意欲を喚起させる。音読評価を繰り返し、自分の音読を振り返ることで音読に対する積極的な態度を養う。

検証3

ペアでの練習後に評価を実施したので、ほとんどの生徒が一定の達成感を持つことができたということが評価シートのコメント欄からわかった。特に他者からのほめ言葉はその生徒の音読姿勢や意欲の向上に影響し、英語の授業そのものが好きになったという生徒もいた。毎回ほぼ全員が熱心に取り組んでいたが、自己評価のため適当に評価をつけている生徒もあり、主観的な評価だけでなく客観的な評価をもっと取り入れる必要があった。

研究の成果

年度当初は一人で英語を発することが苦手だった生徒たちが、ペア練習を通じて少しずつではあるが大きな声で英語を話すことができるようになったのは大きな変化である。音読練習の時の生徒たちは、生き生きとしており、この練習方法を実施して良かったと思った。音読以外にも生徒同士で行う活動ができるだけ取り入れるようにしたことで、生徒同士の距離感も縮まり、声を出す活動も実施しやすくなった。また他者と協力して様々な活動を行うことで、安心感と責任感の両方を感じながら授業に取り組んでいたため、授業自体も活性化した。

今後の授業改善の課題

音読の声の大きさや積極的に音読しようという姿勢は随分と見えるようになってきたが、英文の読み方やイントネーションなどはまだまだ改善されたとは言えない。また、目標とした「ひとりでも」という部分については今回実践した方法だけでは到達できなかった。授業だけでは時間的に不十分のため、家庭学習の中に音読をうまく取り入れ、ひとりで練習する時間を持たせ、授業で評価する方法をとる必要があると感じた。